
白夜叉 = 復活篇 =

水玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白夜叉「復活篇」

【Nコード】

N2124L

【作者名】

水玉

【あらすじ】

いつもと変わらぬ万事屋。

今日も一日無事に過ぎてゆくはずだった…しかし。

坂田銀時、万事屋の主人あての電話…その相手に呼ばれた名は

”白夜叉”の正体を知っているのはかつての盟友、桂小太郎。

高杉晋助。坂本辰馬の四人だけ。

その男の正体とは…?!

プロローグ（前書き）

白夜叉、銀さんの過去や想いそんなのを交えて書いていきます・・・
が

コイツ《水玉》は文才がなさすぎるために下手です；

でも読んでいただけたのなら激しく喜びますんで^^

かまってやってください ほっといていいよ、

流血、残酷な描写が嫌いな方はお引き取りください。

プロローグ

いつからだっただろうか？

俺が、自分が屍しかばねを喰らう鬼と恐れられたのは。

そう思うのは無理もないだろう。

銀色の明らかに異質な髪の毛の色。血のように赤い目…。

鬼だと恐れられても仕方がないだろう。それに身寄りのない俺は戦があつたあと地面が見えないほどに横たわる死体モのなかから

食べ物やお金などをあさっていたのだから。

内臓をあさっているようにも見えたであろう、幾度となく

俺を殺そうと数人の大人が武器で襲ってきたこともあつた。

俺はそのたびに屍から奪った刀を抜き人それを切り捨てただろうか。

返り血で染まつた俺を見て大人たちは声にならない声を上げて

あわててさってゆく。その後ろ姿を見つめながら俺は自分の容姿を
何度呪ったのだろうか。

こんな髪じゃない。目なんて捨ててしまいたい。

そんなとき真っ暗な闇の中でうつっていた俺に光がさした…。

プロローグ（後書き）

ありがとうございます^^

神だあゝ優しさな感謝です。

基本暇人なんで（中2だけど）勉強嫌いなんで小説に逃避してます
んで

こつこつ更新していきたいと思えます^^

巻 過去？仕事以外で聞くんじゃねーぞ

冬が終わり春。

暖かくなってきた今日この頃。真選組は忙しいようだ。

攘夷志士の切り合い。辻斬り。ケンカ…

この江戸で事件が起きないこともおかしなことだ。が…

「ったく…どいつもこいつも…平日にケンカだあ？…クソか」

報告書を読みながら煙草を吸うニコチン中毒者、

鬼の副長と恐れられる土方十四郎。一見顔の良い仕事のできるイケメンだが

かなりのマヨラ、マヨネーズ王子の変人だ。

「おい総悟、寝てるときまでムカつく顔しやがって…起きろこらア
っつ！…！」

「…なんですかい？税金泥棒野郎が」

「お前も税金泥棒なんだよ！」

「マヨネーズ王国の入り口でも発見いたしやしたかあ？」

「うつせえ！仕事だ！ぼけえつつつ！！！！さつさとそれ読みやがれ
！！！！」

ぴらつと沖田に押し付けられた白いコピー用紙数枚の束。

一番上に印刷された文字は”攘夷戦争”と書かれていた。

沖田は何で今更…と土方のほうをみた。

土方はここよんでみると指をさした。

「…これがどうしたんですかい？」

「お前攘夷戦争の四大武神、言ってみろ」

「…桂小太郎、高杉晋助、坂本辰馬、白夜叉ですぜい」

「桂、高杉は攘夷活動を今も続けているが坂本は会社を立ち上げ裏でも何もやっていないことが分かった。…が問題は4人の中でもっとも恐れられたという白夜叉だ。」

「白夜叉は戦死したんじゃないですかい？」

「ああ、だがそいつだけ本名も出身地も何もかもわかっちゃいねえし戦争が終わってからの足取りもつかめねえ、それにそんなに活躍した

武神ならそう簡単に殺られるはずがねえだろ」

「で？目星は付いてるんですかい？」

「ああ、ついてるね…」

「だれなんです？」

土方は煙草を大きく吸い込み煙を吐き出した。

「万事屋だ」

「…旦那が？」

「ああ、アイツは池田屋のとき桂とは知り合いだったようだし、紅桜の件では妙なガキつれたバカ強えー銀髪の侍が紅桜を使用していた

人斬り似蔵を片づけたという情報がある。それにそこには桂、高杉もい合わせてた」

「…もし、旦那が白夜叉だったらどうするんでい？」

「それはきまってるだろ…斬る…」

土方は煙草を地面に落とすと足で踏みつけ火を消した。

「行くぞ、総悟」

「いくつて、どこにですかい？」

「決まってんだろ…万事屋だ」

どんな奴にも過去はある。

他人にはどうのぞこつがわかるわけのねエ過去だ。

たとえそれが家族だったとしても必要ならば斬る。

過去のない人間なんているわけがないのだ。

その過去を根掘り葉掘りほじくり返すのは好きじゃねえが…

仕事は仕事だ。

式 事件予告を出す輩は目立ちたいだけだろ、コノヤロー

「あー…暇…」

「あ、酢昆布きれたね。買ってくるヨロシ。メガネ」

「メガネって、僕にも名前ありますよ、神楽ちゃん」

「新八はメガネしかとりえのないダメガネだからいいんだよ」

「ダメガネってなにー!? 仮にも人間だからね?! 僕!」

ぎゃいぎゃいとケンカを始める二人。

今日も平和な、いや平和すぎて困るくらいの万事屋はいつものこと。

万事屋の主人、坂田銀時は顔をジャンプで覆いソファに寝そべっていた。

「うるせえなあ…その元気はどこから来るんですか、コノヤロー」

銀さんつかれたわ、とふざけまじりにため息をつく。

「なあ? 定春…散歩にでも連れてってもらえ」

「わふ」

いつものように定春は銀時の頭にかみつく。

「いだだだだつ、定春っ」

「定春、そのまま噛み砕くヨロシ」

「おいしい?!俺何にもしてないじゃん?!」

「気分アル」

「気分って何?!気分で銀さんの命奪うんですか?!」

「そうですね、怠けてないで仕事探しにでも行ったらどうですか」

「いだだだだつ、その前に助ける!」

そんな騒がしい万事屋に一本の電話が入った。

銀時は電話に手を伸ばし応対する。

「はい、万事屋ですけど」

こちら側が話しかけても電話の主は黙ったまま。

「...どちらさまで?」

『久しぶりだな、白夜叉』

「?!」

確かに、静かに響いた声。

自分を”白夜叉”と呼ぶ電話の相手。だがその正体を知っているのは数名のみ。

しかしその声は誰とも一致はしない。

「…誰だ？」

『ククク…覚えてないか？銀時…無理もないか…なあ？銀時…』

「誰だときいてるんだよ、聞こえねーのか？あ？」

『外に出ろ』

「外？」

『大切なものを奪われなくなかったらな…待っているぞ』

「おいっ」

電話はツーという音とともに切断された。

声は聞きおぼえがあったものの誰だかは断定できなかった。

それに何故自分の正体を知っていたのか…。

「どうかしました？銀さん」

「どうしたアルか？」

「…いや、なんでもない。仕事いつてくるわ」

「ぼくたちも行きますよ」

「いや、俺一人で十分だ」

銀時は静かに遠くを見つめていた。

神楽と新八はいつもとは違う空気を感じた。

びりびりとした肌を突き刺すような殺気だ。

「…早く帰ってきてくださいね」

「そうね！今日はすき焼きアル！早く来ないとなくなるアルよ！」

銀時はそんな二人にいつものように笑いかけると万事屋を後にした。

+++++

「銀さんどうしたんですかね」

「いつもと違ったアルね」

二人はお茶をすすりながら考えてみる、が全く見当がつかない。

窓からは相変わらず暖かな空気と日差しが差し込んでいるというのに

二人の間にはぐるぐると何かが渦巻いている、

そんな空気を切り裂いたのはある人物の声だった。

「真選組だ！天パはいるか?!」

「どうしたんですか？土方さん。沖田さん」

「銀ちゃんに何かようか？マヨヲ」

「旦那にききたいことがありやして、旦那は？」

「今さっきどこかに行っちゃいましたけど…銀さんがどうしたんですか？」

「銀ちゃんなんかしたアルか？」

「ただの事情聴取ですぜい」

「…ほんとうにいねえみたいだな、行くぞ総悟」

「へい、じゃ、そついで」

ピシャン、とめられた戸の前で二人はただ立ち尽くしていた。

参 黒い絵具も白足してきゃあ白くなるじゃん

銀時は万屋を後にしたただひたすらに人気のない場所へと歩いていた。

否、そういうわけでもない。

先ほどから自分をつけている10人ほどの気配を感じ

わざと人気のない場所へと向かっているのだ。

「…だれの犬だ？」

銀時は振り返らずに呟くと木刀を手に握った。

空を見上げる目はいつもの死んだ魚のような目ではなく

鋭く光る獣のような目だ。

「この写真…見覚えがあるだろうか？」

男が手にしていた写真は血に汚れひどく見づらいものではあったが
はっきりと銀時にはわかった。

「…！な、んで…それを…！」

銀時の声が震える。

「あの大罪人を処刑した時の遺品だよ、白夜叉」

「…！大罪人…？」

「ああ、お前らの師、吉田松陽の処刑を命じたのはわれらの指導者…
黒鬼様…」

「なん…だと…？」

「我々の目的は一つ…お前の中に眠る血《本能》を目覚めさせる」と…」

「な…！」

「なあ？お前は人間なんかじゃない。夜兔、茶吉尼と並ぶ傭兵部族…辰羅なんだよ」

「…まれ…黙れ…」

「その銀色の髪、赤い目、白い肌…すでにほろんだとされている辰羅の生き残り」

「黙れつつてんだ…！！！！」

銀時は木刀で男達を吹き飛ばし、地面に転がった刀を手に取り

返り血で真っ赤に染まるまで斬りつけた。

そこには理性なんてなかった。

ただ、俺達から先生を奪ったやつらを、自分が否定してきた事実を。

すべて切り裂くように刀を振り回した。

気づけば辺りは血の海だった、その時否定できなかった。

自分の中に流れている、辰羅の血を…

この殺し合いを楽しい、そう感じている自分がいた。

コロセ、スベテコワシテシマエ…

シロヤシャ…オマエノナカノ…ケモノヲ…ワスレタワケデハナカロ
ウ？

「黙れ…」

オマエハタタカウタメニウマレタンダ

「うるせえ……」

自分の中にいる血ちが騒さわぐ。

血に濡れた自分を嬉しそうに眺める、そしてもっとやれと煽る。

お前に守るものはいらないと、全て壊せと騒さわぎ、呻く。

銀時は男の手の中にあつた写真を手に取るとそれを見つめた。

その刹那、またもや気配を感じた。

「おい、万事屋…どういうことだ？これは…」

「まるで、血の海でさあ…」

気配は土方と沖田だった。

銀時は二人をかえりみると血が滴る刀を手に持ったまま振り返り

にやりと笑った。その表情はどことなく哀しそうだった。

「こついうことだ…」

その時2人はピリツと感じたことのない殺気を感じた。

今まで相当な人数を斬ってきた、戦ってきた。

が、こんなに強いものは初めてだった。

額に冷や汗が浮かぶ。

「おい、沖田、総悟っこれは……」

「近藤さん……」

真選組局長と数十名の真選組隊員が駆けつけてきた。

銀時はそれに動揺する様子も見せずに刀を持ったままそちらに近づく。

土方はとっさに刀を抜こうと身構えるが近藤に

抑えられた。

「まで！トシ！……お前でも叶う相手じゃねえ……」

近藤さえも感じたことのない空気に

真選組の隊員たちは声にならない悲鳴を上げた。

恐怖に駆られた隊員の数名が斬りかかったがあっさりとかわされ

ばたばたと倒れた。

「…お前らを殺るきはねえよ、そのへんな連中以外は峰うちだ」

銀時は土方の前まで来ると刀を投げ捨てた。

「…お前いつたい…」

「おい…お前が…白夜叉か？」

銀時はフツと笑つとああ、とうなずいた。

「斬られてやってもいいが…今は死ぬわけにはいかねえ…」

銀時は元来た道を歩き出す。

「事が済んだら…お前らに俺の首とらせてやってもいいぜ？」

銀時は暗くなつた空を眺めながら呟く。

「幕府を潰した後にな」

肆 絆はそう簡単に切れるもんじゃねえ

「…銀さん帰ってきませんね…」

「あれから3日たつネ…」

二人の脳裏にはもう帰ってこないんじゃないかという不安が渦巻いていた。

二人にとってもうすでに銀時は家族のような存在だった。

いつも自分たちを理解してくれる家族だった。

それなのに自分たちに背中を預けてくれないのが悲しかった。

そんなとき突然玄関の戸が開いた。

「銀ちゃ…!…!…」

「土方さんに沖田さん…」

「なんね、マヨとサドあるか…」

「旦那帰ってきてますかイ?、まあその様子じゃ帰ってない見たいでさあ」

「銀ちゃんがどうしたあるか？」

神楽がじつと二人を静かに見つめる。

「3日前、万事屋は十二名の幕府の上…黒鬼の差し向けた奴らを斬りそのまま姿を消した。」

「銀ちゃんはむやみに殺したりしないネ！木刀しか使わないアル！」

「…自分が白夜叉だとも認めやしたぜい」

「それに「幕府を潰す」といって消えやがった…」

「幕府を…?!」

「ええ、そのうち旦那も指名手配されますぜい…」

「お前ら、桂の居場所、知ってるか？」

「…うんぬん…」

「そうか…行くぞ」

「あ、あのっ、もし銀さんが指名手配されて捕まったらどうなるんですか…?」

「…処刑…だな」

冷たく響いた言葉。

まだ若い二人には重すぎる言葉だった。

自分たちが慕っていた人が処刑されるかもしれないという事実。

二人は無力さを、自分の無力さをただ痛感していた。

++++
++++
++++

「おい、銀時…」

「なんだあ、ツラ」

銀時は借りた桂の着物を着てまどべから雨空を見つめていた。

「2人が来たぞ」

ゆらりと桂の後ろに現れた人影は見覚えのある顔だった。

黒髪为天パ頭の坂本辰馬と紫がかった髪の毛の

過激派攘夷志士、高杉晋助だ。

「久しぶりじゃのう、金時」

「金時じゃなくて銀時だバカヤロー」

「おい、ツラ、銀時…次会ったときはぶった斬るんじゃないのか？」

「宣言撤回だ、…これ見ろ…」

銀時は男から奪った写真を見せた。

そこには長髪の大人と三人の子供の姿が映っていた。

「…おまえ、これをどこで…」

「…俺を襲撃してきたやつから」

「だからお前、あんなに血だらけで…」

「金時、これからどうするつもりじゃけ？」

銀時はふー、とため息を吐き高杉らをみつめた。

「幕府を潰す」

3人は銀時の口から出た言葉に耳を疑った。

戦いを避ける銀時が幕府を潰すという戦が起こりかねないことを言うのだから。

銀時はいやか？と笑いながら問う。

「幕府はつぶすが、江戸を…一般人まで巻き込むつもりはない戦を行うとしたなら避難させるさ。」

しばらくの沈黙の後口を開いたのは坂本だった。

「わしゃ、やるぜよ」

「…俺もだ、銀時がやるなら、俺もやるぞ」

「ふっ、俺ももう後戻りはできないからな…」

「じゃあ、なかなおりするぜよ！」

辰馬は高杉と銀時のつでをひっぱった。

「うわっ」

「おわっ」

うわっ

互いに額がぶつかり鈍い音が響く。

「うわっ……っ」

「うちの台詞だ！くるくる」

「うっせえ！低杉」

「だれがつ…ふ…」

「その辺にせい、二人とも」

二人の頭をぐしゃりと押さえつけた。

「…わ…ったよ…」

「しょうがねえなあ…」

二人はあきらめ顔で答えた。

「裏切ったら殺すぞ」

「誰がそんな野暮な真似するかバ…カ…、だから背がちっせえんだ」

よ

「関係ないだろ!!!」

そんな光景を2人は笑いながらみている。

かつての仲間4人が再び終結した瞬間。皆嬉しかったに違いない。

これから国を揺るがすこととなる4人。

時代を新しく塗り替えようと手を組み挑む。

雨の降っていた空はいつの間にか青空へと変わっていた。

肆 絆はそう簡単に切れるもんじゃねえ (後書き)

銀さん攘夷志士にもどります。

さて、4人はどうなる…?というかんじです^^

暮 禁断の赤い果実

俺は人間でも、天人でもない。

気づいたらひとりだった。ひとり闇の中をさまよっていた。

そんな暗闇にひらりと舞い込んだ光。

あの光が無ければ俺は今ここにいなかったはずだ。

「いつてくるぜー」

「どっどこいく、銀時」

銀時は桂のほうを振り向き悲しそうに笑った。

しかしその表情は嬉しそうにも見えた。

「アイツらと話してくるわ」

「…戻ってこいよ、必ず」

「フツ、ったりめーだ。もう後戻りなんざしねーよ」

銀時はひらひらと手を振り曲がり角へと消えた。

そこへ高杉がひょっこりとたくわんをこちにくわえながら

やってきた。

「銀時はどーした？」

「…別れを告げてくるそつだ」

「ああ、あの餓鬼どもか…」

高杉はふーん、と興味なさげに返事をし戻って行った。

+++++

アジトをでた銀時はまっすぐと万事屋へと向かっていた。

別れを告げるために、

みなれた看板を見上げれば不思議とさみしさがこみ上げる。

これで最後かなあ、とか頭の片隅で考えつつ階段を上っていく。

玄関の戸を開ければ白い大きな犬が目の前に座っていた。

「なんだ、定春。なんか察知したか？コノヤロー」

「わふ」

定春はかむこともせずただ座っている。

そしてその後ろから見慣れた2人の人影。

「銀ちゃんっ」

「銀さんっ」

「よっ」

かるくふざけ混じりに挨拶をする。

「今までどこ行ってたアルか？」

「心配してたんですよ！」

「ああ、悪かったな…神楽、新八、…俺が戻るまで新八のどこいてくれ」

「なんであるか?!イヤね!銀ちゃんどっか行っちゃアルか?!」

「そうですよ!なんですか?!」

「…ババアには一年分くらいの家賃払ってあるし、銀行には金振り込んであるから
まあ全部坂本のだけど、全部終わったら帰ってくるからよ」

「なんでね！私もいくアル！」

「わるいな、神楽、新八…またな」

銀時は2人に笑ってみせると背を向け万事屋を後にした。

「神楽ちゃん…」

「いやね。私ここにいるある…銀ちゃん帰ってくるまでここで暮らすアル」

「うん…銀さんは戻ってくるよね…」

+
+ +

「…銀時、もういいのか？」

「ああ、あんま長いするもんじゃねえしな…て言つか坂本金ありす
「ぎ

「会社の社長じゃけんのう」

「今こいつは金の底なし沼状態だからな」

「さすが、社長はちがいますねえ（棒読み）」

「金時には無理じゃな！あははっつ」

「っつせえ！いっとけ、いっとけ」

「まあ、飲むぜよ！」

「昼間っから？」

「銀時ほどほどにしておけよ、あまり強くないだろう？」

「大丈夫だって！昔よりはました！」

まだ昼だというのに酒をとりだす二人。

その光景を桂と高杉はやれやれという表情で見ている。

その晩、全員が飲みつづれるまでその宴は続いた。

+++++

「…情報なしか…おい総悟っ！なんかあったかあ？！」

「へーい、攘夷に関しては何も入ってませんが…旦那についての情報が一つありやすぜい」

「万事屋の？」

「へい、どうにも旦那の容姿がある種族と一致してるんでさあ」

「…種族？」

「ええ、すでにほろんだとされる辰羅族でさあ」

「なんだと？…辰羅？」

土方は耳を疑った。

辰羅とは夜兎、茶吉尼とならぶ傭兵部族。

しかも辰羅はすでにほろんだとされる種族なのだ。

特徴は銀色の髪に赤い目、白い肌。見た目は人間と変わらない。

性格も夜兎のように野蛮ではない、が、それは覚醒していない時だけだ。

ひとたび覚醒すれば夜兎以上の…数倍の力を持ち

星をつぶすほどの力を得る。

かつて覚醒した辰羅があるほしへと降り立ち暴れ回った結果。

星はさらちへと変わった。ほんの数時間で。

だがもともと少ない種族であったため自然的にほろんだとされていた。

「だが、完全な辰羅ではないみたいですよ。」

「どういういみだ？」

「人間と辰羅の間に生まれた…つまり天人と人間のハーフでさあ」

土方は煙を深く吸い込み空を眺めた。

「幕府がつぶされんのも時間の問題っつーことか…」

禁断の事実。

それを知って、幕府の存続の状態を知る。

「総悟、お前はとうしたい？」

「…できれば旦那を斬りたくないですがあ…斬れる相手でもありませんが」

「そうか…」

青く澄んだ空はどこまでも続いていった。

,

暮 禁断の赤い果実（後書き）

タイトルの意味わかりました？

禁断の実 〓 銀さんの真実。

それを知ってしまったら勝ちめもくそもなくなる感じという…

真選組を潰すつもりもないですよ^^

六 死ぬときは一緒、それは4人の絆

「で…その黒鬼くろまきとかいう奴が先生の処刑じょけいを指示したと…」

「ああ、」

「そいつはどこにいるんだ？」

「確か、ターミナルの最上階だ。今頃、悠々と江戸をながめてらあ」

「問題はいつ、それを実行するか…」

「戦にもなりかねんからのう…一般人まで巻き込みとうない」

「ああ、だからわざとそれを幕府あづちにほめかせばいいんだろ？」

銀時はすくつと立ち上がり戸に手をかけた。

「どこに行く銀時」

「…だから、今からよこくしてくるわ、」

「なっ…お前だけじゃ…」

「大丈夫だって、真選組って討幕宣言してくらあ」

銀時はひらひらと手を振りさっていった。

のこった3人はしかたない、とそれから計画をねることにした。内容は、倒幕するまでの手取り。

そしてそのあと、倒幕してからは天皇に権力を返す。

しかし政治は天皇ではなく一般人も含め行っていくものとなった。着々とすすみつつある計画、

その発端はすべて、幕府だった。

++++++
++++++
++++++
++++++
++++++

「まったく…情報でてこねえ…なんでだ？」

「お前の腕が悪いんだ土方」

「なにコイツ?! お前だってなんもつかんでねーだろーがッツ!」

いつものようにケンカを始める二人の前にある人物が現れた。

「…!」

「よ、お二人さん…一か月ぶりくらいかな？」

「白夜又てめえっ…！」

「その白夜又つてやめてくんね？まあ、いいや…予告しに来たただけだし」

銀時は表情を変えずにぶざけたような態度で話を進める。

「予告…？だと…？」

「ああ、近々俺達はターミナルを破壊する」

「……！」

「その際、一般人が怪我するといけないから避難させとってって話し」

「お前…フツーなら一般人なんてどうでもいいだろ？」

「…俺達が望むのは倒幕…あの時の復讐だ…」

「復讐…だと？」

銀時はフツと笑ってみせるとその場から立ち去ろうとした。
が当然のように周りには囲まれていた。

「飛んで火にいる夏の虫だな…」

「…そう？じゃあ、桂たちに適うかどうか…はかってやるよ
全員いっぺんにかかってきな」

銀時のその言葉に全員が斬りかかった、が土方は気づいた。

「まで！……やめろ！……！」

しかしその言葉もむなしく聞こえない。

銀時は確かに笑っていた、その目はいままでの目ではなくまろしく
白夜叉……

ザンッ

そして銀時の周りにいた隊員は地面に倒れこむ。

「大丈夫、峰打ちだから」

「……お前、何故殺さない？」

「…必要が無いから、今は、ね…もちろんこれ以上邪魔するなら容赦なく斬るよ?」

銀時はカシャン、とさやに刀を納めると門へと足を向け歩き出す。

「真選組はこのまま幕府なんかについてていいの…?」

それだけ言い残すとさつていった。

「くそっ…何なんなんだ？」

「土方さん、全真気絶してるだけですぜい…殺す気はなかったみたいですよ…」

怪我もこれっぽっちもしてない見たいだ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2124/>

白夜叉 = 復活篇 =

2010年10月13日13時41分発行